

# 全国指導員学校東北会場



# 子ども支援の視点学ぶ 指導員800人が参加



岩手県学童保育連絡協議会  
〒020-0122  
盛岡市みたけ3-38-20  
岩手県青少年会館内  
Tel・Fax 019-681-0651

全国連協と東北の各県連協などが主催する第43回全国学童保育指導員学校東北会場は7月8日に仙台市の宮城教育大学で開催されました。東北を中心に全国の指導員約800人が参加。岩手県からは194人が参加しました。

今年の指導員学校は参加者が過去最多となり、会場の収容人数を大幅に超えたため、全体会は別会場を設けて映像中継されました。

全体会では新潟大学の植木信一教授が「子どもの力を引き出す学童保育」と題して講演。

植木氏は子どもは自分自身で育っていく力を持って

従うべき  
基準堅持

## 県議会への請願取り組み

県連協は「従うべき基準」を堅持する意見書の提出を求めて岩手県議会への請願署名に取り組みます。

この署名は9月議会への提出を目指し、9月5日までの期間で行います。県内の学童保育クラブにおかれま

しては、岩手県議会でのこの請願が採択されるよう署名への協力をお願いします。7月6日には埼玉県議会

が「従うべき基準の堅持を求める意見書」を採択しています。

さきの国会に提出されていた「従うべき基準を堅持する請願」は残念ながら採択保留となりました。



いる。学童保育指導員は子どもの発達を促していく役割があると指摘しました。

また、東日本大震災の際に避難所で行った子ども支援の活動を紹介。ストレスを抱えた子どもが遊びを通して自らのストレスを解消していく様子から「遊びの力はすごい。遊びが子どもの発達を促していく」「指導員は子どもが主体的に遊びに関わる環境、条件をつくっていくことが大切」と強調しました。

さらに「子ども支援」と「子育て支援」の違いを説明。どちらも考えていく

ことは必要としながらも「学童保育は子ども支援が優先する」と述べました。そして「子ども支援とは管理や見守りではなく、寄り添うこと。寄り添いには信頼関係が必要」と説き、子ども支援のポイントを解説

しました。

植木氏は講演の中で従うべき基準の見直しについても言及。「子どもの生活を豊かにするためには様々な特技、個性を持った指導員が複数人必要」と述べ、同基準の重要性を訴えました。

### 分科会参加者の感想

#### 指導員間のチームワーク

比内 沙耶火 (気仙たけのこ学童クラブ)

第5分科会では東北6県から参加者がいて、東北各県や各地域の職場の様子を聞くことが出来ました。なかには苦労を抱えている地域もあり、まだまだ学童クラブの認知や定着が足りていないということが分かりました。

また、支援員同士のチームワーク、打合せなどについて運営指針やテキストを活用しながら学びました。少人数の職場でも複数でいることを活用する。「伝えがおかなくてはいけない」ことは日誌に残し、引き継ぎをする。しっかりと引き継ぎがなされていることで、保護者も子どもも安心することができるということを聞きました。私たちの仕事

は子どもたちが安心して過ごせること、保護者が安心して子育てと仕事を両立できるように支援することであり、そのためにも打ち合わせや引き継ぎをしっかりと行っていかなければならぬのだと再確認しました。

### 保護者に放課後の生活を伝え、ともに育てる

磯貝 多恵子 (盛岡・上田学童保育クラブ)

第3分科会では、「保護者に子どもの生活を伝え、ともに育てる」というテーマを学びました。保護者が安心して働き続けるため、われわれ支援員はどんな支援をしていくのか、ともに子どもを育てていくため、伝えあうことの重要性について門田弘之先生よりお話ししていただきました。

われわれ支援員の役割は、「保護者の育児を肩代わりするものではなく、パートナーとして連携していくこと」とありました。このことについて、自分が保護者にとって信頼できる存在になっているか、またそうなるためにはどのような関わりをしていくべきか、改めて考えさせられました。子どもの「今」を「成長過程の今」として捉え、支援員がどう思うかで日々子どもにかかわっているの

### 障害児とともに育ち合うための生活づくり

古川 晴一 (花巻・南城学童クラブ)



### 生活づくりで大切にしたいこと

茂木 妙音 (北上・北上学童保育所つくしクラブ)

気になる子、発達障害の子ども達をどのように支援していけばよいのかと思いつつ、受講しました。印象に残ったのは、ほめ方やネガティブ↓ポジティブへの変換についてです。変換実践を難しく考えていましたが、解答例を確認するとそんなに難しく考えなくてもよいことに気がつきました。

主体的とは…から始まった分科会。自分が日々の保育の中で、子どもの「○○したい」という思いを受け止めるのかと考えるながら受講しました。異年齢の子どもたち同士のかかわり、低学年の子どもたちが多い児童の中で、高学年にもしっかりと目を向け「安心できる聞き手」になることが大切というお話が印象に残り

ました。グループワークでは、宿題、遊び、子どもへの声掛け、先輩の指導員とのかわりなど、経験年数が近い先生方の悩みを聞き、「自分だけではないんだ」と安心しました。子どもたちが「今日も学童に帰りたい」と思えるような学童をつくるために、今自分ができること、まだまだだなと改めて感じた研修会でした。

### 学童保育の生活とあそび

天麻 遼太 (久慈・小久慈たんぼクラブ)

例①:「14時まではゲーム禁止!」↓「14時から一緒にゲームできるよ」  
例②:「3時まではおやつを食べません」↓「3時になったらおやつにしよう。麦茶、飲む?」  
例③:「急に来ないで!」↓「云いたいなと思ったら、まずは連絡してね」  
など、置き換えることによりやる気を起こす言葉になるそうです。学童でも実践していきたいと思います。

前半はデータを基にした現状や発達性トラウマ障害などを学習。後半はアセスメントの方法や現状理解と目標設定など、より実践的な内容でした。子ども達は心の発達が未熟であり、その心を直接見ることができません。その

「学童保育の生活と遊びを考える」、「遊びを通して実際の関わりの中から」、「実際のあそびの様子から」という内容で3人の講師の話をお聞きしました。「学童保育の生活と遊びを考える」では、学童保育の役割や子どもの生活を学びました。支援員の配慮すべきこと、子どもが遊びを通して成長することなど思い返すことができました。遊びは子どもの気晴らしになり、たくさん成長につながります。子どものやる

見えない部分を理解することが指導員に求められることの一つと再認識しました。また、指導員が使えるスキルもあれば、子ども自身も使えるものもあり、勉強になりました。そして「優れた指導員さんは表情豊か、言葉がけが

### 子どもの気持ちに気づく

武田 恵実 (滝沢・菓子学童保育クラブ第二)

ことに文句ばかり言うのではなく、もつと自由でなければいけないと感じました。「遊びを通して実際の関わりの中から」ではグループワークを通して他の学童の遊び、おやつを取り組みを知ることができ良い刺激になりました。「実際の遊びの様子から」では、津山児童クラブの保育の映像を見ました。子どもたちが自由に遊び、のびのびと過ごす姿は理想的で、いつかこんな保育をしてみたいと感じました。

巧みです」という言葉が非常に印象的でした。忙しい日々だと、「子どもたちが何を願っているのか、どうしたかったのか、どうなりたいたのかを考えることまた、それを指導員の言葉ひとつで引き出すことが可能になったり、関係が良いものになる」という大事な点を失念してしまいがちですが、心にとめていきたいと思えました。